

〈能なしワニ④〉

ワニよ銃をとれ

中井紀夫



著者略歴 昭和27年生、蔵蔵大学
人文学部卒、作家。主著書「南か
ら来た拳銃使い」「裏切り砦の拳
銃無頼」「恋の拳銃無宿」(以上
早川書房刊)

HM=Hayakawa Mystery
SF=Science Fiction
JA=Japanese Author
NV=Novel
NF=Nonfiction
Jr=Junior
FT=Fantasy
YR=Young Romance
GB=Game Book

能なしワニ④
ワニよ銃をとれ

〈JA261〉

昭和六十三年三月二十日 印刷
昭和六十三年三月三十一日 発行

(定価はカバーに表
示してあります)

著 者 中 井 紀 夫

発 行 者 早 川 清

印 刷 者 矢 部 富 三

発 行 所 株式会社 早 川 書 房

東京都千代田区神田多町二ノ二
郵便番号 一〇一
電話東京(二五二)三一一(大代表)
振替口座番号 東京六四七七九

乱丁本・落丁本は本社またはお買求
めの書店にてお取替えいたします。

印刷・三松堂印刷株式会社 製本・大口製本印刷株式会社

ISBN4-15-030261-8 C0193

ハヤカワ文庫JA

〈JA 261〉

能なしワニ④

ワニよ銃をとれ

中井紀夫



早川書房

2378

日本財団支援

笹川良一記念文庫

財団法人日本科学協会

カバー／口絵／挿絵

沖 一

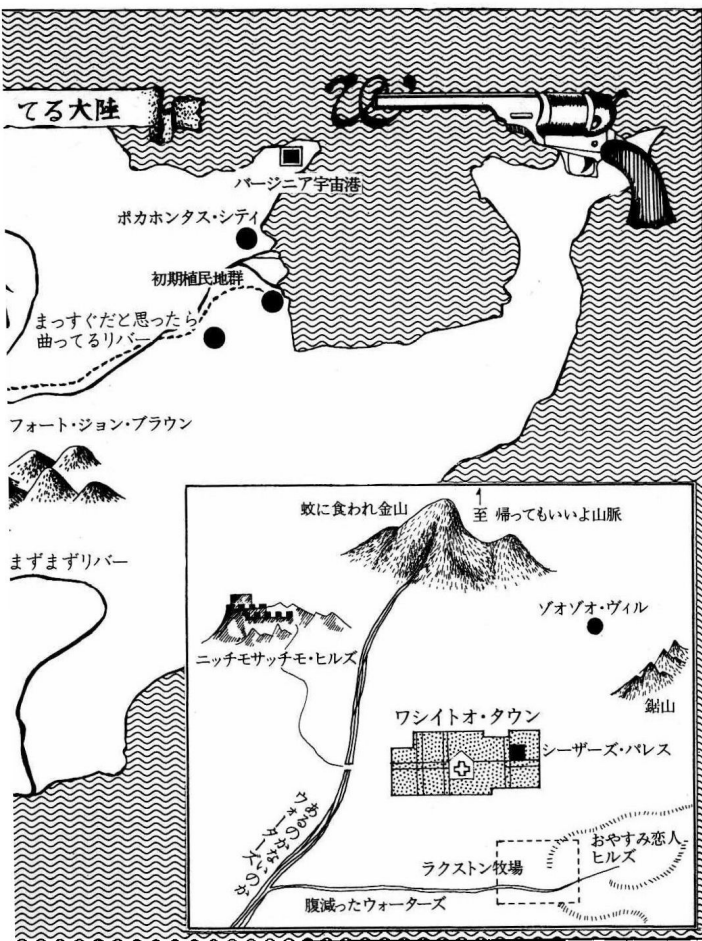
目次

第一章 金鉱の町 9

第二章 カルロスの砦 167

第三章 ラクストン牧場 265

あとがき 363



行けば行くだけ広がっ

グ
ラ
ン
ド
・
グ
ラ
ン
ド
・
キ
ヤ
ニ
オ
ン

■ 第二の宇宙港

いい加減トレイル

ヒヤアナンテ・マツシロケナコッタ山脉

ナッツの聖地

バーブルヘイズ
なんて奴だ山脉

行っ
たつ
きり
の
レ
イ
ル

ナッツの聖地

もひとつあくび
平原

ダオダ・シティ

帰ってもいいよ山脉

ナッツの聖地

ワシイト・タウン

ナッツの聖地

ツームーン

ワニよ銃をとれ

登場人物

ワニ……………能なしの拳銃使い
クサフリ……………ワニと組んで放火能力を発揮する男
マリエ……………ワニたちの能力を増大させる力をも

つ酒場女

尻尾怖い……………ショホニ族の酋長
ママンティ……………オロホワ族の呪術師
カウマネク……………パイヤト族の使者
カルロス……………ギャングのボス
フリオ……………カルロスの弟
ホセ……………カルロスの子分。拳銃使い
ムーンシャイン……………カルロスの子分
ビート……………牧場主。元保安官
ローラ……………女教師。ビートの恋人
ジョニー……………牧童頭
モンタナ……………なんでも屋
トゥータフトゥーダイ……………巨漢の賭博師
ハリー……………保安官
ミカ……………少女アンドロイド
ジョージ……………酒場の主人

第一章 金鉱の町

1

かつてそこは花畑だった。平原をわたってくる風の温度が変わるにつれて、さまざまの花がかわるがわる大地を彩った。いまは、その名残りの幾株かが、荒れた地面のところどころに、遠慮がちに小さな花を咲かせているだけで、あとは名もない雑草の天下になっている。

風に吹かれて、コロゲヨモギが転がってきた。水気のなくなった葉がこすれあって、かさかさとした乾いた音をたてながら、風のあいまに立ち止まってものを思うようにふるふるとふるえたり、またあてどもなく転がりはじめたりする。そのコロゲヨモギが止まったあたり、白茶けた地面のうえに、磨きあげられた黒曜石の鏝^{ヤジリ}が、半分土に埋もれるようにして落ちていた。この惑星の原住民ナツツとの戦闘のおりに落とされ、そのままになっているものようだ。

花畑のむこうに、丸太を隙間なく植えならべた背の高い防柵が長く延びている。酋長尻尾^{チーフ}怖い率いるシヨホニ族ナツツとの戦闘で名高いフォート・ジョン・ブラウンの防柵である。砦の

南方に位置するだまぐらかし山地から尻尾怖いが姿を消して以来、この砦もまたわずかの駐留部隊をのぞいて、人の姿がなくなっていた。

人手がないためであらう、防柵は乾燥し、ひび割れるままになっていた。中央にある門よりやや右手の部分では、何本かの丸太が白蟻のたぐいにやられたらしく、ぼろぼろに崩れおちて、防柵に穴があいてしまっていた。

その防柵の破れ目から、細身の女がひとり、外に出てきた。太腿の赤いガーターが見えるほどスカートをたくしあげて、丸太の崩れ残った部分をまたぎ越し、それから振り返って、丸太越しに、防柵の内側から二つの大きな革製の旅行鞆と日傘を取った。重い丸太組みの門扉を押しあけるより、破れ目を通る方が楽だったのだろう。

脇の下に日傘、両手に鞆を抱えて、女はかつての花畑のなかへ歩いていき、人工的なものらしい盛り土のまえて、鞆を地面のうえに下ろして立ち止まった。盛り土は湿った焦茶色をしていて、周囲の白っぽい土のなかではひどく目立つ。長さ二メートルほどの長方形で、一方の端に、黄色っぽいバンダナを結んだ木の枝が突き立てられていた。

女は盛り土のまえて立つと、両手を胸のまえて組んで瞑目した。先刻のコロゲヨモギがまた風にあおられてかさかさと転がりはじめた。

長いあいだ、彼女は盛り土のまえて立ちつくしていた。

防柵と反対の方から、胸当てつきのズボンを穿いたかなり齡をとった男が近づいてきて、彼

女とならんで盛り土のまゑに立ち、帽子をとって頭をたれた。

女はフォート・ジョン・ブラウンの酒場じゃまっけ木株の娘マリエ、齡をとった男は砦がまだ小さな交易所だった時代からここに住みついているコロラド・キンジローであった。ならぶとマリエの方が背が高い。

ひとしきり黙禱をささげてから、コロラド・キンジローは帽子をかぶりなおした。

「新しい井戸は見つかったの」マリエが言った。

「見つかったさ」キンジローは手に持っていた木の枝を自慢げに掲げて見せた。子どもの遊ぶパチンコのように、二股に分かれた枝であった。「こいつが教えてくれた。しかし、掘る者がいない。わしひとりで掘らねばならん。このあたりじゃ、水脈はむやみに深いから、ひとりでこつこつ掘っていたのではどれほどかかることやら。むかしはひとりで、年に四つも五つも井戸を掘ったもんだが、この齡になるとなかなかそうもいかない」

「そんなことはないでしょう」

「もちろん、掘るつもりだがね。しかし、砦もさみしくなったもんだよ。あんたも、いなくなっちゃうってわけだ」

「ええ。残留部隊の兵隊さんだけが相手じゃ、酒場をつづけていてもあんまり儲からないし、パパも死んじゃったことだし……」

マリエは焦茶色の盛り土をさみしげに見やった。

「ディック・ガスリー……」

キンジローも盛り土に目を落とした。墓標がわりの黄色いバンダナが、もひとつあくび平原の風にはたはたとはためいている。

「気の毒なことだったな。シヨホニとの戦闘のあと、龍宮城から帰った浦島太郎みたいに、急に老けこんじまって……。まえにも訊いたような気がするが、ありや結局どういうことだったんだ。人を急速に老化させるフレモント少尉の能力、ガスリーもあれにやられたんだったかな」

「そうじゃないわ。直接やられたわけじゃない。少尉が死んだあとで、パパはほんとうの自分の齢にもどったのよ」

「——ああ、思いました。フレモント少尉が老化能力を使って皆のだれかを老化させるたびに、ガスリーはその反作用で若返って、本来の年齢より若くなっていた。それが、少尉が死んだために、本来の自分の年齢にもどってしまった……」

「そう」

「しかし、本来の自分の年齢といっても、わしとおなじか、もう少し若いぐらいのものだろう。くたばっちまうほどの齢じゃない」

「若返ったり、急に齢をとったりで、からだがめちゃくちゃになっちゃったらしいわ。最後は頭までおかしくなっていたみたい。あたしに、色目を使ったりして」

「じつの娘に……か」

キンジローは慰め顔でなんともうなずいた。

「それにしても、あのショホニとの戦闘はずいぶん派手なことだったなあ。あんたもずいぶん活躍だった」

マリエは苦笑した。「まったく。丸太に縛られて火あぶりにされそうになるやら、素っ裸でトカゲ車の幌のうえに上るはめになるやら」

「素っ裸でか。そいつは見たかったな」

「よしてよ。好きで裸になったんじゃないわ」

「そういえば、例の火噴き男二人組はどうしたかな」

「ワニとクサフリ？」

「それぞれ。妙な連中だったな。ワニの方は井戸掘り部隊にまわされて、わしの井戸掘りを手伝ったりもした。元気があって愉快なやつだった」

「元気がありすぎて迷惑だったんじゃないの」

「いやいや、若いうちは元気がありすぎるぐらいの方がいい。あのふたりのおかげで、砦の危機は救われたわけだし、あんただってショホニに火あぶりにならずにすんだんだろう」

「でも、あたしがいなきやだめだったのよ」

「あんたが？」